



2018.7

vol.17

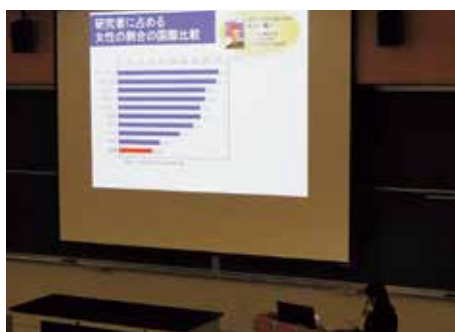
第1回医学系研究科男女共同参画推進委員会 およびキックオフ講演会開催

この度、医学系研究科に男女共同参画推進委員会が発足いたしました。それに伴い、平成30年3月6日に第1回医学系研究科男女共同参画推進委員会およびキックオフ講演会を開催いたしました。杏林大学男女共同参画推進室長の荻田早苗氏を講師にお招きし、「女性研究者の活躍推進とは?～杏林大学における男女共同参画活動の経験から」と題し、杏林大学の男女共同参画推進室の取り組みについてご講演いただきました。

杏林大学は、環境整備や両立支援ツール、意識啓発の他、女性研究者の裾野拡大を積極的に行っており、このような取り組みの結果、平成28年度東京都女性活躍推進大賞を受賞されております。杏林大医学部女性教授登用の取り組みとして、最初に女性教授を3名輩出。その後、准教授を増員し、現在では10名を超える教授を輩出されております。群馬大学のデータから見えてくるものとして、全国データと比べ、医学系女性研究者の比率が少なく、教授・准教授の割合も少ない旨のお話もいただきました。その対策として、若手女性をキャリアアップさせるための3つの「き」(①機会を与える、②期待する、③キャリア・マネジメント)・意思決定の場への女性の登用・幅広いロールモデル・ハラスメント対策・バーンアウト予防等のアドバイスをいただきました。

講演後のアンケートでは、9割が「非常に有益だった」もしくは「有益だった」との評価でした。「女性でも研究者・医療者としてキャリアを積めるような取り組みは大変有意義であると思った」(学部生)、「『支援された分お返しする』を肝に銘じました」(教員・医師)、などの感想が寄せられました。今回のキックオフ講演会を参考に、今後、医学系研究科全体で男女共同参画に必要な環境作りに取り組んでいきたいと思っております。

キックオフ講演会終了後には、昭和キャンパスまゆだま広場にて荻田氏を囲んだ意見交換会が開かれました。和やかな雰囲気の中にも活発な意見交換や情報共有が行われました。



女性研究者比率20%を達成 群馬大学におけるダイバーシティへの展開



第三期中期目標・中期計画に掲げた

女性研究者在籍比率 **20%**
役員に占める女性比率 **12.5%以上**
管理職に占める女性比率 **14.3%以上**

すべての目標値を早期に達成しました。

平塚浩士学長へ 本多悦子特命理事からインタビュー

女性限定公募が目標達成の原動力

本多：女性研究者在籍比率 20%、役員に占める女性比率 12.5% 以上、管理職に占める女性比率 14.3% 以上という目標の中で、役員と管理職については早々に目標を達成。女性研究者在籍比率も第三期目標期間の半ばの3年目という早い時期に達成できました。ここに至るまでのさまざまな取り組みの中で、特に平塚学長が良かったと思うのはどんな点でしょうか？

平塚：あまりにも早い目標達成。望外の結果です。みなさんが頑張ってくくださったおかげです。良い結果が出た要因の一つは、女性限定公募を積極的に理工学府で行ったからではないでしょうか。新しい課題に取り組むのは大変ですが、本学の場合は、現場のみなさんがうまく取り入れてくださいました。本当にありがたいと思っています。

本多：その中では紆余曲折があったと思います。

平塚：男女共同参画の取り組みをはじめたきっかけは、本学の経営協議会委員だった元お茶の水女子大学の郷通子学長に「群大では女性研究者支援をしていないけれど大丈夫ですか」と尋ねられたことでした。正直なところ、言われるまでは工学部に女性が少ないのは当たり前と思っていた部分もあるのですが、当時、工学部の女性教員は僅か4人。全体が200人ですから割合にすると2%。全国のランキングで本学が最下位グループに入っているのを見て、真剣にやらざるを得ないと思いました。



当時の高田学長に申し上げたところ「すぐにやりましょう」と、取り組みがスタート。まずは女性教員の数を2倍にするの

が目標でした。努力が実って今は10人。決して多くはありませんが、倍増したのはうれしいですね。理工学府の先生方が非常に熱心に取り組んでくださいました。

本多：JSTでもこれは高く評価を受けました。

平塚：正直言って、当時は男女共同参画関係がとりあげられる色々な会合に行くに恥ずかしい思いをしており、このような状況を早く抜け出したいと思っていました。先ほども申しましたように、今は、教員の数が10名に増えましたが、まだまだ少ないと思います。さらに倍増していきたいですね。ロールモデルとして、女性教員をどんどん増やしていく。男子学生以上に元気な女子学生が多いですから、頑張って大学の教員になってほしいと思っています。

課題の鍵を握るのは働き方改革とチームワーク

本多：この取り組みの継続は必要ですね。理工学府は、女性限定公募をもっと増やしていくこと、医学部医学研究科は上位職の増加が大きな課題ですね。

平塚：医学部は女子学生が多く、教員も女性の助教や准教授が多いので、女性の割合は高いですよ。次のステップへの進み方として、臨床系はどうしても強靱な体力が必要ですから、できれば基礎医学系に期待したいですね。ゆくゆくは基礎医学で上位職の限定公募もあり得るかな、と思っています。

本多：できれば、複数誕生していただけるといいですね。

平塚：私立大学ですと臨床教授というのがあります。准教授から任命する臨床中心の教授です。優秀な女性教員を招聘するためには北海道大学・九州大学のようにご夫婦2人分のポストを用意しておくのも一案です。

本多：岩手大学は、日常的に配偶者やパートナーと住まいを別にする2か所居住（両住まい）をせざるを得ない研究者に、お住まいと行き来しやすいように、「両住まい手当」を出しています。群馬も東京から近いので行き

群馬大学男女共同参画推進室は、平塚浩士学長（当時研究・企画担当理事）のリーダーシップのもと、2013年に発足しました。ジェンダー平等、女性研究者、女性管理職、女性職員の割合の向上等を目的としてライフ・ワーク・バランス、働き方改革に取り組んでいます。

2013年度から3年間、本学が提案した『まゆだまプラン』が文部科学省女性研究者研究活動支援事業に、また、2017年度には『まゆだまプラン-アドバンスト』が文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業（特色型）に採択され、本学の女性研究者支援を推進しています。

本学の第3期中期計画、中期目標に掲げた男女共同参画に関するすべての数値目標を早期に達成することができました。これを記念して、平塚学長へのインタビューを特集します。

来する方が多いかもしれませんね。病院も働きやすい環境でないとそのまま続けて上位職に、というのは難しいと思います。また、病院に限らず、働き方改革が大きく取り上げられています。群馬大学もワーク・ライフ・バランスに取り組んでいます。その中で、今後必要になるのは何でしょうか？

平塚：私がアメリカに留学していたころ、働き方を見ると、朝にきちっと来て、5時になるとピタッと帰るんですね。何故これができるかという、一つは早く帰って研究の方法や実験の仕方など、効率を上げているんですね。日本人は時間で稼ごうというところがありますから、そもそものスタートが違うんです。もう一つは、留学生やポストドクを上手に活用しているんです。チームワークですね。私もそうでしたが、日本人の研究者はすべて一人でやろうとする人が多いので効率が悪くなりますね。

本多：チームをつくるために人員を増やさないといけないのでしょうか？

平塚：そうですね。仕事をしやすい環境を整えると効率が上がって成果が出ます。そのお金で人が雇える。いい循環が生まれ、残業時間も減ります。

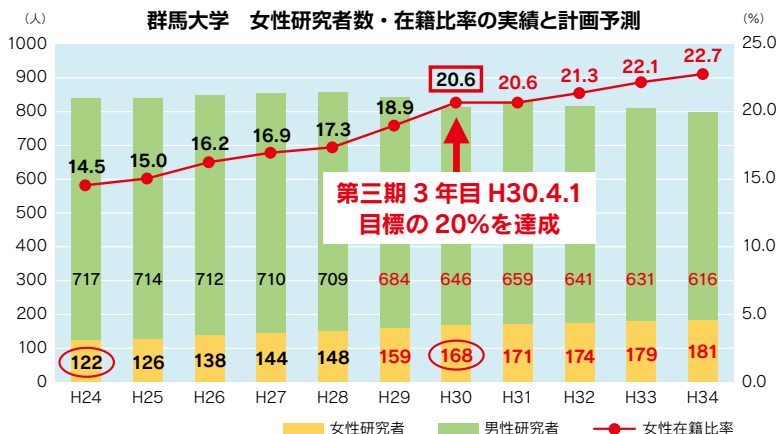
本多：男女共同参画推進室の発足、「まゆだまプラン」の取り組みから6年目を迎えています。これからのまゆだまに期待することは何ですか？

平塚：男女共同参画推進室を今の学長直轄的組織から、全学にかかわるセンターの様な組織の一つに移行すべき

ではないでしょうか。組織改革を行い、人数も増やして。ダイバーシティの問題に取り組むことができる環境を整備することが重要かと思います。

本多：恒常的に学内に設置された組織という位置づけも不可欠なんですね。

平塚：大学の重要な取り組みの一つであると全員が認識する必要があります。それを表すのが組織化。まずは大学の体制をととのえる。そして次のステップに進んでいただければと思います。



20%達成を記念してダルマに目を入れる平塚学長

英語研究力アップ講座 開催

本年度は、国際センターとの共催で2月22日、28日に荒牧キャンパスにて英語研究力アップ講座「『英語による講義』実践演習でスキルアップ!」を開催し、英語での授業における明確でシンプルなフレームワークについての説明を受け、その後自身の研究をテーマにした「ミニ授業」の構成を考え、互いに発表し合いました。また、3月8日、9日に桐生および昭和キャンパスにおいて英語研究力アップ講座「効果的な研究発表のためのアカデミックライティング講座」を開催しました。主に研究業務に携わる教職員及び学生を対象として研究活動に欠かせない英語論文執筆に関する様々なノウハウを学びました。年度末の多忙な時期にもかかわらず、荒牧18名、桐生21名、昭和36名と各キャンパスで計75名もの参加者を集め、関心の高さがうかがえました。講師の方には英文校正者の立場から陥りやすい間違いやポイントについて実例を交えて紹介して頂き、大変有意義な時間を過ごしました。また、講師の方のユーモアあふれるトークで会場は大いに盛り上がり、参加者も積極的に英語で質問をしていたのが印象的でした。実施後のアンケートでは、「実用的な内容で大変参考になった」「伝えるという視点での英語の活用法が良かった」「疑問に持っていたもなかなか聞けなかったことが解決できてよかった」等のご意見を頂きました。今後も研究力の向上に役立つ企画を計画していきたいと考えています。



荒牧キャンパス



桐生キャンパス



昭和キャンパス

女性活躍セミナー「えほん『ルビィのぼうけん』にみる女の子の可能性」開催

3月15日、本年度新設された「数理データ科学教育研究センター」との共催事業として、女性活躍セミナー「えほん『ルビィのぼうけん』にみる女の子の可能性」を開催しました（参加者59名）。この絵本はフィンランドのリンダ・リカウスさんがプログラミングの魅力を子どもたちに伝えたいという願いを込めて作られた素敵な本です。15か国以上で翻訳されており、日本に紹介した翻訳者でありプログラマーの鳥井雪さんと2月に理工学府電子情報部門に着任した桑名安奈助教を招いて、女性の可能性を広げるプログラミングの世界について語っていただきました。当日は、赤ちゃん連れのお母さんも参加され、和やかな雰囲気の中、プログラミングは世界を変えるツールとなり、性別にかかわらず挑戦してほしい分野であることが伝えられました。

鳥井さんは、より多くの女性がプログラミングに親しみ、アイデアを形にできる技術を身につける手助けをするコミュニティ“Rails Girls”の活動にも取り組んでおり、その楽しそうな様子も報告されました。桑名助教は、プログラミング教育の導入について、環境を整え続ける難しさ、実際体験してみる意義についてお話してくださいました。山崎数理データ科学教育研究センター長とのミニトークも行われ、参加者からは、「プログラミングには、ほとんど興味がなく、専門的なイメージも強かったのですが、自分らしさが出せるおもしろい職業だと感じました」「問題をとらえ、細かく分け、1つ1つ解決していく力をつける、プログラミング教育の意義がわかりました」など意識啓発につながる感想が多数寄せられました。

